

全教第41回中央委員会での山口隆中央執行委員長のあいさつ

10月14、15日、東京・全国教育文化会館

確定闘争や教育全国署名のとりくみにご奮闘いただいているなか、中央委員会にお集まりいただき、ありがとうございます。全教中央執行委員会を代表して、本中央委員会の討論で深めていただき、意思統一をおこないたい課題について、2点にしばって申し上げ、ごあいさついたします。

第1は、文部科学省が、実現すれば30年ぶりとなる学級編制の標準の引き下げと、そのための、これも10年ぶりとなる教職員定数改善計画を策定し、来年度、小学校1・2年生の35人学級実施のための予算を概算要求したもとの、私たちの運動をさらに広げて、何としてもこれを実現させるための討論と意思統一です。

全教は、すでに9月3日に全国代表者会議を開催し、この秋、憲法を生かす2つの大運動を提起し、意思統一をおこないました。これを受け、多くの組織の機関紙で、その1面に教育全国署名がかかげられており、この秋のもっとも重要なとりくみとしての位置づけが、はっきりと見て取れます。そして、自治体や都道府県、市町村PTA連合会への申し入れなど、大変力のこもったとりくみがすすまられています。文部科学省は来年からの35人学級実現のための予算を「政策コンテスト」にかけるとしており、私たちの運動の強化が、とりわけ求められる課題となっています。そのために、運動の飛躍が必要です。

教育全国署名推進ニュースでも紹介されていますが、私の出身の大教組東大阪では、今年6万筆という目標を掲げ、とりくみます。この単組のこれまでの実績は、昨年度で約4000筆というものです。この実績からすれば、到底実現できそうにない目標ですが、本気で6万筆をやりあげようとしています。そのための決定打は、単位PTAに申し入れをおこない、文字どおり父母、教職員の共同のとりくみとすることであり、すでにとりくみが開始されています。私は、全国代表者会議でも、9月30日におこなった財務省前要求行動でも、繰り返し、すべての単位PTAに署名を持ち込み、父母自身の運動として発展させよう、と述べてきましたが、これを正面から受け止めた行動が早速展開されていることは、大変うれしいことです。すべての組織で、各単位PTAへの申し入れ懇談を強め、大いにとりくみを前進させようではありませんか。

本中央委員会では、この秋の憲法を生かす2つの大運動についての討論の柱を設け、中央委員のみなさんに討論を展開していただく予定をしています。とりわけ教育全国署名については、身の丈にあわせた目標ではなく、運動の必要性から導き出される目標として設定し、そのためにどのようなとりくみが必要か、という積極的な討論を展開していただくよう、お願いするものです。

第2は、全教結成20周年にふさわしい組織拡大の飛躍をかちとる討論と意思統一です。

全教は、10月2日から3日にかけて「職場活動の活性化、組織の拡大強化をめざす全国交流集会」を開催しました。冒頭、6人の青年によるシンポジウムを開催し、自分がなぜ組合に入ったのか、いま組合についてどんなことを考えているのか、などについて発言してもらいました。そこでは、大変リアルな発言が相次ぎました。岐阜の教員2年目の青年は、7.27新採シンポでの「新採教員は孤独」という発言に共感したと述べ、自分の体験をこう語りました。「声をかけてもらえなかった時の私というのは、毎日何かにおびえていて、近くにある職員室の電話がなると、僕が何かを失敗して苦情の電話がかかってきたのか、と勝手にすごしてきたんです」「声をかける側が、僕たちが抵抗感をもっていると思って身構えて声をかけられると『入りますよ』なんて言いづらいんです」

また、これも教員2年目の埼玉の青年は「職場ではじめて声をかけてくれたのは組合の先生でした。なにかあっても相談できるような気がしました。声をかけられたことで不安が和らいだことをおぼえています」と語りました。

私は、9月の全国代表者会議で、組合員拡大をすすめるために大事なことは、第1に声をかけること、と強調しましたが、そのことがこれらの青年の言葉によって見事に裏付けられているのではないのでしょうか。

そうして加入した青年たちが、すでに自分たちにできることは何かについて真剣に考え、とりくみはじめています。先ほど述べた岐阜の青年は、「私はまだなんにもできないけれど、そんな私でも声をかけるということ、青年の先生と組合をつなぐ架け橋になれるかなと思って、これからも微力ながらやっていきたい」と語りました。また、埼玉の青年は、「組合活動とおして、学校が子どもにとっても、働く私たち教師にとっても「いい場所」としていくことができたらな、と思っています」と語っています。

これらは、職場でのつながりづくりにとりくみたい、子どもがすこやかに育つ学校づくりにとりくみたいという決意のあらわれそのものであり、青年のもつすばらしい力と可能性を示しているのではないのでしょうか。

いま、声をかけられるのをまっている青年がたくさんいます。いや、青年だけではありません。多くの教職員が声をかけられるのをまっています。この間の経験則は10人と対話すれば、1人が加入するというものです。この秋の2つの大運動とむすび、1万人拡大のために、10万人の教職員との対話を壮大にすすめようではありませんか。今日、明日の中央委員会で、その決意溢れる積極的な討論が展開されることを心から期待し、あいさつといたします。